

発刊のことば

三花郷土史誌づくり委員会委員長

財津 徹

三花公民館の文化活動の一環として、「三花史誌」づくりに取り組んだのは昭和六十二年の暮れでしたが、その後六年余を経て、ようやく発刊の運びとなりました。

この間、各町内におきまして、資料の提供をはじめ、習俗、伝承など広範にわたる取材にたいし、格別のご教示とご協力を賜りました各位に、改めて厚くお礼申しあげます。

いま、当地でも三花公民館を主体にして、地域おこしの気運の高まりをみていますが、これにはまず、地区民それぞれが、自分の郷土を知ることが何より肝要と思われれます。

「温故知新」と申しますが、このたびの「三花風土記」の発刊は、たんに郷土の歴史を知るだけでなく、これによって、厳しい暮らしのなかから先人が遺してくれた多くの業績を学び、さらに今後目指すべき方向を考えるうえからも、極めて意義深いものがあるかと存じます。

本書について、ぜひ地区の多くの方々のご高覧を願いますとともに、あわせて忌憚のないご意見、ご批判も賜りたく存じております。

発刊にさいし、物心両面にわたってご協力いただきました各位に、重ねてお礼を申しあげ、さらに、長期にわたって編集にあたられました委員各位のご苦勞に感謝申しあげ、発刊のことばといたします。

発刊にあたって

三花公民館々長 日野正則

高度経済成長に伴う開発によって、破壊されていく自然や文化財。生けるものの生命を脅かし、植物の枯死をも招いている大気汚染や水質汚濁。さらに加えて、生活の都市化と地方の過疎化によって失われつつある歴史的文化遺産や伝承など。憂うべき今日の状況は、周知の通りであります。

対して、人間としての良識は、これらを後世に残す「保護・保存・記録」の活動となつて、各地で高まりを見せてきたことも、また当然のことでもあります。

私たちの三花地区においても、その気運は澎湃として起こり、花月パイパスの開通・高速自動車道工事などが思いを加速させました。機、熟せりの頃に、館長に就任した私にとつては、まことに幸いの刊行の提唱となつたことを、ひそかなよろこびとしています。

かくして、昭和六十二年十二月、「三花郷土史誌づくり委員会」が、各自治会長さん推せんによる委員によって発足したのであります。

以来、六年有余。実地踏査・資料の発掘・また、地区の方がたによる資料提供の協力など、委員の方がたの献身的なご努力と相まって、三百ページを超える冊子がここに完成いたしました。命名して「三花風土記」とし、望外の幸せとするものであります。

まさに、地区民の希いが、委員に人を得ての結実と申せましょう。

おわりに、関係者各位と、特に編集を担当された各氏の今日までのご労苦に対し、心からの感謝を申し上げます、発刊を祝うことばといたします。

目次

発刊のことば 委員 長 財津 徹
発刊にあたって 三花公民館長 日野 正 則

第一章 地区の沿革

第一節 夜明から明治へ	一
一 地区の概況	一
二 豊後風土記の五郷	二
三 天領日田	三
四 村のすがた	五
第二節 明治から大正・昭和へ	七
一 日田県―大分県への編入	七
二 三花村の誕生	八
三 町村合併で日田市へ	一〇
四 市ノ瀬町、小河内町の沿革	一三
五 大字と字と行政区画割	一三

第三節 郷土の地名

一 三花の地名	一五
一 田籠の由来	一六
2 由緒を語る地名	一六

第二章 三花のむかし

第一節 古代の生活を遺跡に見る	一八
一 弥生時代	一九
二 古墳時代	二三
三 歴史時代	二六
四 古代の三花	二七
五 大蔵氏の抬頭	二八
第二節 中世は武士の活躍	三〇
一 中世三花の記録	三〇
二 三花武士団、財津氏の起こり	三〇
三 大友氏の支配と八大郡老	三三
四 財津一族の奮戦	三四
五 財津永満・鑑永の事蹟	三八

第三節 近世への橋渡し…………… 四二

- 一 新しい時代への動き…………… 四一
- 二 大友氏の衰亡と日田の変化…………… 四三
- 三 時勢の転回、財津氏の動き…………… 四四
- 四 武士の意地―彦山騒動…………… 四五
- 五 威勢の余光…………… 四七
- 六 日田を出た財津氏…………… 四八

第四節 近世、天領の時代…………… 五二

- 一 庄屋の始め…………… 五一
- 二 庄屋と村民―藤山村騒動…………… 五三
- 三 庄屋と農民―穴井義民の直訴…………… 五四
- 四 広瀬淡窓と三花…………… 五五
- 五 幕末動乱期の三花…………… 五六

第五節 近代を迎えて…………… 五八

- 一 県の官員様に…………… 五八
- 二 騒擾事件と三花―神宮寺事件…………… 五九
- 三 騒擾事件と三花―竹槍騒動…………… 六一
- 四 騒擾事件と三花―竹橋事件…………… 六三

第六節 戦争の嵐の中で…………… 六五

- 一 国民皆兵…………… 六五
- 二 戦場へ…………… 六六
- 三 戦いのおかげで…………… 六六

第三章 教育と文化

第一節 学校教育…………… 七〇

- 一 中世の教育…………… 七〇
- 二 寺小展の時代…………… 七一
- 三 咸宜園に学んだ人びと…………… 七三
- 四 明治の学制改革…………… 七四
- 五 小学校の変転…………… 七六
- 六 中学校の推移…………… 七六
- 七 青年学校…………… 七九
- 八 託児所、保育所、幼稚園…………… 八〇

第二節 社会教育…………… 八三

- 一 青年団…………… 八三
- 二 婦人会…………… 八四

三	村農会、戸主会	八四
四	公民館の時代	八五

第三節 子どもの風景

一	学校で	八六
二	学校の「思い出」から	八七
三	あそびと仕事	九二

第四節 文化と文化財

一	古代の生活用具	九八
二	中世の仏像	一〇一
三	近世の文芸と文書	一〇五
四	その他の文化財	一一〇

第四章 産業と交通

第一節 産業と暮らし

一	農業をふり返る	一一三
二	農作業の四季	一一七
三	むかしの畑作	一二六
四	むかしの物産	一三〇
五	畜産	一三三

六	養蚕	一三六
七	植林の歴史	一三八

第二節 近代の改良

一	伏木湿田の耕地整理	一四三
二	伏木牧場の開設	一四六
三	小河内の開拓人	一四七
四	風呂元井堰と水路	一四八
五	髪永の堤防と井堰	一五〇
六	大井手水路	一五三
七	伏木開拓団の入植	一五四
八	山田原の開発	一五六
九	農地改革	一五九

第三節 交通

一	街道	一六一
1	代官道路	一六一
2	彦山道	一六三
3	小倉道	一六五
4	小河内道	一六六
5	藤山の高札場	一六七

二	石坂の改修	一六
三	伊能忠敬の測量	一七一
四	県道・国道の整備	一七三
五	花月パイパスの開設	一七六
六	むかしの旅	一七八
七	交通安全の願い	一八五
	秋原の地藏菩薩	一八五
	道祖神	一八六
	馬頭観音	一八七
八	羽野の常明灯碑	一八八
第四節 伏木峠と大石峠		
一	日田の北口として	一九〇
	伏木峠	一九〇
2	大石峠	一九三
二 通行の人びと		
1	廣瀬淡窓と家族	一九四
2	廣瀬旭荘と五岳	一九五
3	夏目漱石	一九五
4	森鷗外	一九六

第五章 習わしと伝説

5	昭和天皇の巡幸	一九七
三	三花防空監視哨	一九九
第五節 災害と人びと		
一	飢饉	二〇一
二	水害	二〇四
三	大火	二〇〇
四	伝染病	二〇一
第一節 古い習わし		
一	一生の儀礼	二二三
	むかしの出産・育児	二二三
2	結婚のしきたり	二二六
3	通過儀礼	二二九
4	葬送の風習	二三〇
二	懐かしい年中行事	二三三
三	盆踊り	二三〇
第二節 伝承の咄し		
一	彦山の開祖―藤山の恒雄	二三九

第六章 自然と人物

第一節 ふるさとの自然

- 一 風雪に耐えた名木……………二五三
 - 1 財津天満宮のクス……………二五三
 - 2 山の神のスギ……………二五三
 - 3 伏木のサクラ……………二五四
 - 4 ムクとエノキ……………二五五
 - 5 市ノ瀬のムク……………二五六
 - 6 三和小学校のトウカエデ……………二五八
- 二 身近な名勝……………二六〇

- 二 山童になった子ども……………二四一
- 三 用松の首なし地蔵……………二四三
- 四 羽野天満宮の奇瑞……………二四四
- 五 あて外れた千倉市……………二四七
- 六 丈助喰い……………二四八
- 七 かつぱと小豆洗い……………二四九
- 八 髪掛け松……………二四九
- 九 石が語る……………二五〇

第七章 ふるさとの言葉

- 第一節 方言あれこれ……………二七四
- 第二節 郷土のことわざ……………二七七

第二節 世につくした人々

- 一 菅 樵禪……………二六八
- 二 菅野兼之……………二六九
- 三 高取成章……………二六九
- 四 高取悦堂……………二七〇
- 五 刀鍛冶―山上国隆ほか……………二七一
- 六 宮川文一郎、梅子……………二七三

- 1 龍ヶ鼻(龍体山)……………二六〇
- 2 養面寺の清水……………二六三
- 3 斎藤家の「伝・雪舟の池」……………二六三
- 4 底霧の展望……………二六五
- 5 立花邸と水路……………二六六

附録

一	金石文	二九三
1	石阪修治碑	二九三
2	財津長門守記念碑	二九四
3	三花村沿革史碑	二九五
4	長尾清右衛門景久之墓	二九六
5	菅野先生之碑	二九七
6	悦堂高取先生の墓	二九八
二	三和・花月字名一覧	三〇〇
	三花の歴史・略年表	三〇九
	あとがき	三二七